文の勉強

文の勉強

文は、なかみをちゃんと伝えるために、いろんな部品からできています。その部品について勉強します。

Q1 「走る。」というだけでは、文になりません。ちゃんとした文にしましょう。

走る。

Q2 「先生、一年生が。」も、文ではありません。ちゃんとした文にしましょう。

先生、一年生が

★文には、次の三種類があります。

なになに（だれだれ）が　どうする。　　犬が　走る。
なになに（だれだれ）は　どんなだ。　　犬は　かわいい。
なになに（だれだれ）は　なんだ。　　犬は　ほにゅうるいだ。

文の中で、「なになに・だれだれが」と「どうする・どんなだ・なんだ」は、なくてはならない部品です。

主語と述語
文の中で、「なになにが」「なになには」のやくめをする単語を主語といいます。
文の中で、「どうする」「どんなだ」「なんだ」のやくめをする単語を述語といいます。
主語は、伝える相手に、この文はなについてのべるかをさしだすやくめをしています。述語は、さしだされた人やものなどのうごきやありさまをのべています。

Q3　「お父さん」を主語にして、三種類の文を作りましょう。

お父さんが　（どうする）

お父さんは　（どんなだ）

お父さんは　（なんだ）

授業の中では、文を図にして書くことがあります（文図）。主語と述語は、次のようにあらわします。

犬が ――― 走る。

Q4　「すずめが　とんでいる。」という文を、文図にあらわしましょう。

―――

文の中には、主語・述語だけではなかみをちゃんと伝えられないものがあります。

Q5　「友だちがけった。」では、なかみがわかりません。なかみのわかる文にしましょう。

友だちが　けった。

「ける」という動きには、かならず「ける」ものがあります。これも、文の中ではぜったいに必要な部品です。文を絵にすると、同じ絵の中に登場するものです。

Q6　「父が買ってあげた。」をちゃんとした文にしましょう。

父が　買ってあげた。

必要な部品は、一つとは限りません。「買ってあげる」という動きには、「買う」ものと、「買ってあげる」相手が必要です。

補語（ほご）
文の中で、「なになにを　だれだれを」とか、「なになにに」などのやくめをする単語を、補語といいます。
補語は、述語のあらわすうごきやありさまがなりたつために必要な人やものを補い（おぎない）ます。
補語のはたらきは、おぎないです。

文図では、次のようにあらわします。

犬がえさを食べた。

以上で、文の大切な部品（骨組み）は終わりです。でも、文は、もっといろんな部品をもっています。

Q8　次のそれぞれの二つの文を絵にすると、何がちがうでしょう。

①　今朝、一郎くんがパンを食べた。

②　夕方、一郎くんがパンを食べた。

①　運動場で、一郎くんがボールをけった。

②　公園で、一郎くんがボールをけった。

一郎くんのしたことを絵にするだけでは、どちらも同じです。でも、ちがうのです。何がちがうのでしょう。

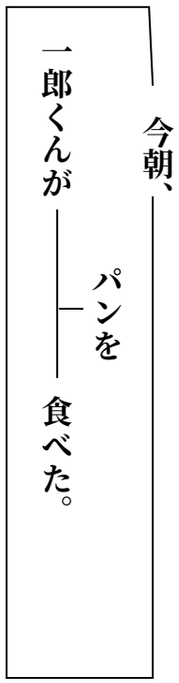
状況（じょうきょう）語

文の中で「いつ」「どこで」「なぜ」「なんのために」などのやくめをする単語を状況語といいます。

状況語は、「できごとやありさまのなりたつ時、場所、原因、目的」などをあらわしていて「できごとをとりまいています。

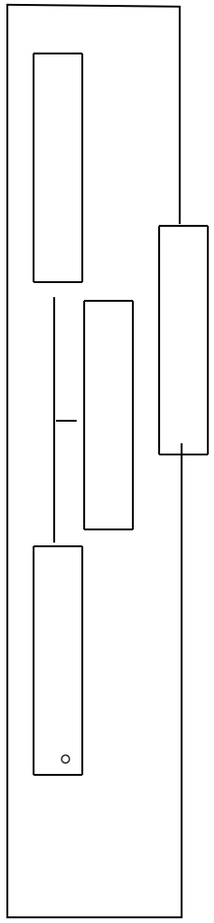
文図では、次のようにあらわします。

今朝、一郎くんがパンを食べた。



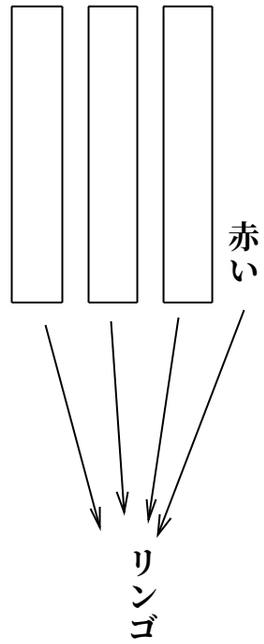
Q9　次の文を文図にしましょう。

公園で、一郎くんがボールをけった。



文の部品の中には、ものや動きをくわしくしている部品があります。そうやって、文は、どんどんくわしくなり、絵もわかりやすくなります。

Q10　リンゴをくわしくしてみましょう。



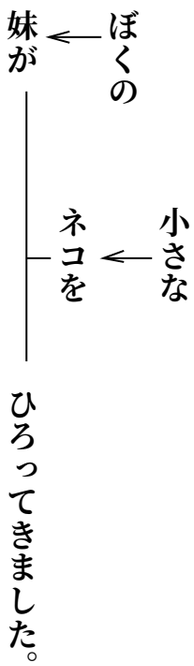
> **規定（きてい）語**
> 文の中で、「どんな」「なにをしたか」のやくめをする単語を規定語といいます。
> 規定語は、主語や補語や状況語など（名詞でできている文の部分）をいろいろとくわしくします。
> 規定語のやくわりは、かざり（つけ）、きめ（つけ）です。

Q11　次の文の規定語に線をひきましょう。くわしくされている単語をかこみましょう。

ぼくの妹が、小さなネコをひろってきました。

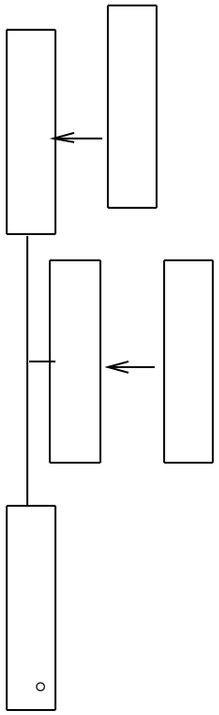
小さなすもうとりが、大きなすもうとりを投げつけた。

文図では、次のようにあらわします。

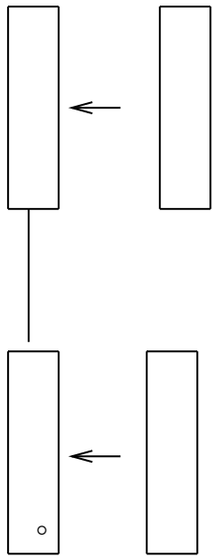


Q12　次の文を文図にしましょう。

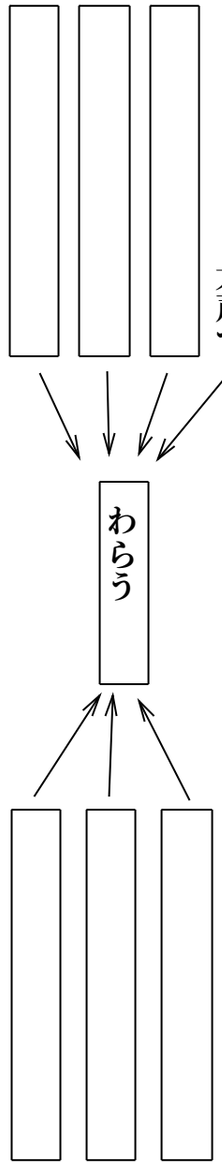
小さなネコが大きな魚を食べた。



その本は、ぼくの本です。



Q13 「わらう」を、くわしくしましょう。

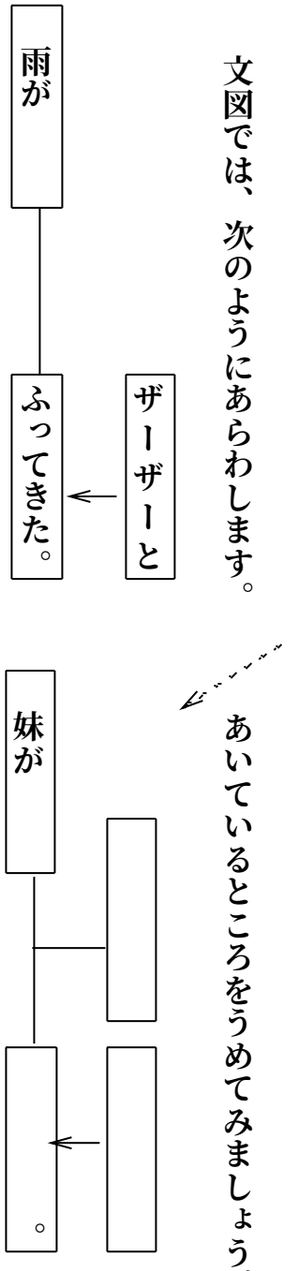


修飾（しゅうしょく）語
文の中で、「どのように」「どれくらい」のやくめをする単語を修飾語といいます。修飾語は、述語であらわされるうごきやありさまをくわしくしています。

Q14 次の文の修飾語に線をひきましょう。くわしくされている単語をかこみましょう。

雨がザーザーとふってきた。　妹がジュースを二はい飲んだ。

文図では、次のようにあらわします。



あいているところをうめてみましょう。

独立語
文の中で、主語や述語や補語などと直接むすびついていないものがあります。これを、独立語といいます。独立語は、文と文とのつながり（接続語）や話し手の気もち（陳述語）や、うけこたえなどをあらわします。

雨がふってきた。だから、ぼくたちは、中ですごした。
（つなぎことば）　そしれて、それから、でも、けれど、だから、それでも・・・
「早く来いよ。」「うん、わかった。」
（うけこたえ）　はい、いいえ、もしもし、ねえ、ええ、へえ、・・・・・
やっと、宿題が終わりました。
（「やっと」は、宿題の終わり方ではありません。話し手の気持ちをあらわします。）
もう、どうぞ、ぜったい、きっと、たぶん、おそらく、どうか、すこしも、まさか・・・

Q15 次の文は、どうちがうでしょう。

① 雨がしとしとふる。
② 雨がザーザーふる。
③ たぶん、雨がふる。
④ きっと、雨がふる。
⑤ もう、雨がふる。

以上で、文の部品については終わりです。
けれど、じっさいの文では、いくつかの文が組みあわさっている文もあります。

Q16　次の文は、二つの文でできています。／で分けましょう。
また、それぞれの文の主語に ＿＿ 、述語に ～～～ をひきましょう。

例　空は晴れていたのに、／雨がふってきた。
① 花がさき、鳥が鳴く。
② 色は美しいし、においもよい。
③ わたしが世話をしたので、花がきれいにさいた。
④ 台風で道がくずれたが、けが人はいなかった。
＊⑤ わたしが育てた花を、お母さんがぬいてしまった。

文図では、次のようにあらわします。

花が ―― さき、
鳥が ―― なく。

わたしが ―― 世話をしたので、
⇦（原因）
花が ―― きれいに さいた。

＊⑤は、「わたしが育てた」という文が、「花」をくわしくしています。こういう文も、たくさんあります。

〔わたしが ―― 育てた〕
← 花を
お母さんが ―― ぬいてしまった。

★　また、主語は一つで、述語が二つ以上ある文もあります。これを、ふたまた述語文といいます。

Q17　主語に ＿＿ 、述語に ～～～ をひきましょう。
① うちのネコは、小さくて、とても かわいい。
② 今年も、残雪は、がんの群れをひきいて、ぬま地にやってきました。

文図では、次のようにあらわします。

うちの
⇙
ネコは ―― 小さくて、
とても
← かわいい。

今年も ―― 残雪は ―― がんの⇓群れを
―― ひきいて、
ぬま地に
―― やってきました。